

審議（会議）結果

審議会等名称 第14期第2回神奈川県生涯学習審議会

開催日時 令和元年6月6日（木曜日）15時00分～17時00分

開催場所 神奈川県産業振興センター 6階大研修室

出席者【会長・副会長等】

青木信二（公募委員）

浅野邦彦（神奈川県公立小学校長会副会長）

市川さとし（神奈川県議会議員）

小野晴子（公募委員）

木下敬之（神奈川県公民館連絡協議会会長）

小池茂子（聖学院大学教授）【副会長】

小山徹（神奈川県公立中学校長会書記）

鈴木紀子（横浜国立大学男女共同参画推進センター准教授）

鈴木眞理（青山学院大学教授）【会長】

萩原建次郎（駒澤大学教授）

山田信江（神奈川県社会教育委員連絡協議会理事）

※令和元年5月現在 五十音順

次回開催予定日 令和元年7～8月ごろ

所属名担当者名 生涯学習課 森、鈴木、比留間

掲載形式 議事録

議事概要とした理由 一

審議（会議）経過

1 開会＜事務局＞

2 あいさつ＜生涯学習部長＞

（傍聴者確認）

3 議題

（1）第14期生涯学習審議会諮問事項「神奈川県におけるこれからの家庭教育支援のあり方について」

○鈴木会長

最初に、前回までの審議の概要について、事務局から報告願います。

○事務局

「資料1」によりご説明します。

前回は、第14期の第1回でしたので、会長、副会長の選出、教育委員会から諮問、および委員の皆さんの自己紹介を行いました。その中で、諮問テーマである家庭教育支援についてのご発言もありましたので、かいつまんでご紹介します。

家庭教育支援を取り巻く現状については、親子の時間が十分にとれているのかという危惧への発言や、誰もがちょっとしたことで孤立化してしまうハイリスクな社会状況であり、経済的な貧困だけでなく、関係性の貧困が広範に広がっているという指摘がありました。

「家庭教育支援のあり方」に関する主な発言としては、障がいのある方も含めて何か“困っている家庭”への支援の必要性への指摘や、“共生社会”や“地域ぐるみ”といった言葉で表されるように、みんなで家庭を支えていくことが大切であるとの指摘、また、一方で、様々な課題への対応が、今、いずれも地域に求められている現状への懸念も示されました。そのほか、当事者の視点の必要性、男女の働き方の問題、食育等についても言及がありました。

今後の審議の進め方については、当事者の困難に寄り添うような支援についてまとめていきたいとの発言や、答申は誰に向けたものとするのかを考えなければならないなどの指摘がありました。

○鈴木会長

前回の内容について確認いたしました。

質問がなければ、本日は、青木委員、萩原委員に発表をお願いしておりますので、まず、青木委員より厚木市の事例について発表をお願いします。

○青木委員

私は、現在、森の里公民館長をしておりますが、その前は、厚木市の社会教育委員を務めていました。そのときに、事業の立ち上げに関わった「地域ぐるみ家庭教育支援事業」についてご紹介します。

厚木市の社会教育委員会議では、私が参加するよりも前から長年、家庭教育の向上がテーマとなっていました。啓発やチラシの作成が主な活動という状況でした。そこで、何か具

体的な行動ができないかと考える中で、平成 23、24 年度に家庭教育支援に関する報告書を作成し、教育長に提出しました。そして、従来なら報告書を提出するとそれで終わりということが多かったのですが、この報告書では、その内容が、市の施策として具現化されることが次のステップであると位置づけました。そこで、続く平成 25 年度には、報告書をもとに、より具体性をもった施策を研究し、提案書「家庭教育支援の具体的な施策について」をまとめて、平成 26 年 6 月に教育長に提出しました。

提案書の内容をご紹介します。

家庭教育支援の手法には様々なものがありますが、便宜上、学習型、啓発型、対処型（アウトリーチ型）の三つに分類しました。このうち、学習型、啓発型は予防型として整理することができますが、その二つと対処型との間には大きな隔りがあるように思われます。そこで、その二つの間に、人と人をつなぐ事業として「地域ぐるみ型」を位置づけました。具体的には、家庭教育支援という視点から地域ぐるみで地域の子どもへの関わりを日常化したり、問題が起こる前の対策を長い時間をかけて地域ぐるみで事業化することを考えました。

これを、厚木市において具体的な施策とするために、提案書では次のような内容を提案しました。厚木市に合った施策として、家庭と地域をつなぐ取組を実践すること、厚木市は地区公民館が充実しているので、これを拠点とすること、家庭教育支援という視点で既存事業を見直し、生かした事業とすること、地域の諸団体が協働することの 4 点です。これが名付けて「地域ぐるみ家庭教育支援事業」です。

「地域ぐるみ家庭教育支援事業」の目的は、「地域で子どもを育てる」という意識を確立し、子どもに関わる「つながりづくり」を構築することです。

この事業では、問題を抱える個々の家庭への直接的な対処を行うのではなく、その前段階において、社会教育の立場から講座や体験活動等の事業を展開し、地域のつながりを強化させることで、家庭教育を支援します。また、既存事業を家庭教育支援という視点で再検証することによって家庭教育支援事業を実践するため、新たな予算はゼロです。この、社会教育委員会議の提案を事業の概念図として教育委員会が作成したのが、6 枚目のスライドの図です。

そして、この提案は平成 26 年度にすぐに事業化され、まず、睦合南と森の里の 2 地区をモデル地区として開始されました。この 2 地区が選ばれたのは、ここには、長年社会教育委員を務めるなど、地区の人たちを説得できる人材がいたためです。すでに述べたとおり、この時点では予算ゼロの事業なのですが、自治体においては、予算がつかないと、厳密には施策事業と言わないそうです。そこで、更にモデル地区を増やした後、平成 29 年度には、新たに予算をつけて、全 15 公民館区で実施することとし事業化しました。また、各地区での実践に加えて、年に 1 回、各地区の関係者が一堂に集まり「地域ぐるみ家庭教育支援事業フォーラム」を開催することによって、事業目的への理解が高まっています。

次に、森の里地区における実践例についてご紹介します。

森の里地区は、2,633世帯、人口6,675人を擁し、市の小・中学校、公民館および、県立の高校や私立大学、企業の研究機関などもある地域です。森の里地区の地域ぐるみ家庭教育支援事業推進委員会は、自治会や青少年健全育成連絡協議会（青健連）、地域子ども教室、地域福祉推進委員会・老人クラブ連合会等の地域の様々な団体や、小学校、中学校、およびPTAなどの代表により構成されています。

森の里では、“体験により、子どもと大人が、ともに楽しみ、ともに学び、ともに育つ”を基本的な活動方針としています。ただ体験型の活動を行うのではなく、親も参加でき、子どもたちの成長を目指す内容とすることによって、大人の価値観が変化したり、子どもを縁に大人同士がつながることができる活動となり、子どもも大人も成長するまちづくりへとつながります。森の里地区では、既存事業のうち14事業について家庭教育支援、特に「親子で参加」をキーワードとして取り組みました。また、研修会や学びの講座を開催し、ディスカッションする場を設けるなどして、地域の人たちの理解を深める取組も併せて行いました。

こういった実践を通じて、子ども、大人それぞれの成長はどうか、という観点からの考察を推進委員会がまとめています。それによると、子どもたちについては、行事に中学生も参加してもらい、スタッフの役割を担わせると、世話される立場から世話する立場になるので、その時の気持ちが、一つの気づきとなっているようです。また、小学生にアンケートをとったところ、「地域に参加する」にイエスと回答する割合が圧倒的に多くなりました。これは、長年かけて地域で子どもを育てようという機運が根付いているからではないかと思われます。大人についても、家庭教育支援事業を実施することによって、親も子どもと一緒に行事に参加するようになり、地域のつながりができるようになりました。このことは、一番大きな効果ではないかと思えます。また、子どもと同じ体験をし、同じ場を共有することは非常に大切ではないかと思えます。その中でできた、子どもを縁としたネットワークが、将来大きな役割を果たすのではないかと考えています。

次のスライド（19枚目）の図も、推進委員会が作ったものです。「つながりの連鎖反応」と呼んでいるもので、子どもが事業に参加すると、集まった保護者の場ができる、それがきっかけとなって事業に参加するようになる、大人が参加することによって、子どもが参加するようになる、という循環がぐるぐる回り、輪ができてくる。これを続けていった結果、子どもの参加より大人の参加のほうの輪が大きくなるという面白い結果が出ています。私自身も、子どもはすでに卒業していますが、今の地域のつながりは、PTAや育成会といった子どもの縁でつながっているものです。そういうことを地域でやっていけば、孤立する家庭が生まれにくいのではないかと思えます。もちろん特例はありますが、それはプロにお任せして、私たちは、社会教育の立場から、なるべく、家庭が困った状況に陥るのを予防することを日常生活の事業の中で展開することが大切ではないかと思っています。

ただし課題もあります。それは、参加しないままの子どもがいることです。これを解決していくために、今後は、学校と協働するべきではないかと考えています。学校と協働すれば、

ほぼ 100%の子どもたちが参加してくれます。ですから、私たちは現在、コミュニティスクールのほうにも力を注いでいます。

20 枚目のスライドは、森の里地区はどんなまちづくりかを考えて推進委員会が作った図です。普段は、公民館、青健連、PTA等それぞれが事業を行っていますが、真ん中に家庭や子どもを据えて考えると、おのずと緩やかなつながりを持つことができます。お互いに協働し合うまちづくりにしていくことが大切であることを表した図となっています。これを私たちは、「森の里のつながりの輪」と呼んでいます。こういうまちづくりをしていけば、家庭教育支援事業も成功するのではないかと考えています。

最後に、地域ぐるみ家庭教育支援事業を成功させるために必要なこととして、これまでの経験から感じたことが4点あります。一つは、根気よく継続した事業に育てることが大切であることです。1年や2年では成果は出ません。10年15年続けていかないといけないと思いますので、今まで通り粛々と事業を展開し、そこでは、学びながら自分たちがステップアップすることが大切だと考えています。二つ目は、子どもの縁で人と人のつながりづくりを構築していくこと。三つ目に、こういう事業をやるのが、地域づくり、まちづくりそのものであり、育成事業も、家庭教育支援事業も、更にはコミュニティスクールも、まさにまちづくりではないかと思えます。まちづくりができていないところは、コミュニティスクールもできないのではないのでしょうか。つまり、まちづくりさえしっかりしていけば、家庭も地域もみんなのつながりができるのではないかと思っており、「育成事業イコールまちづくり」であるといつもお話しています。最後に四つ目として、継続するためにもつながりづくりのためにもまちづくりのためにも、地域の核になる人づくりが一番大切ではないかと思えます。この人づくりを粛々とやっていく必要があります。しかし、人づくりは、こうやればこうなるというきちんとしたルートはないので、みんなが日常で楽しく事業を展開していくことが人づくりにつながると、最終的にはそう思っています。10年後ぐらいを楽しみに、いい人が育てばいいなと思っています。

○鈴木会長

確認することは何かありますか。なければ、続けて萩原先生に発表をお願いします。

○萩原委員

駒澤大学の萩原と申します。私に与えられたテーマは「社会教育における家庭教育支援のあり方について」と、かなり広いテーマで、どういう視点で話題提供すればいいかなと思っていたのですが、前回、私の方からは、子育て当事者の視点がないと、何をもって支援になるのかという、その支援のあり方がずれるのではないかと、当事者のニーズと大きくずれてしまうと支援にならないのではないかという問題提起をしたので、そういう立場から皆さんと一緒に考える素材を用意させていただきました。

まず、一番目として、家庭教育・子育て支援の現状と課題を、国の調査で確認をしておきたいと思えます。前回の審議会事務局から配布された資料3-5、この中に、家庭教育や子育ての現状に関する調査結果が出ています。ここには、大きな傾向が出ているので、そこ

からかいつまんで現状を確認します。まず、約4割の保護者が子育てに悩みや不安を抱えていること、地域の中で子どもを通じた付き合いが減少していること、そして、孤立化による児童虐待のリスクがあること、更に、三世帯世帯の減少と、その一方でひとり親世帯が増加していること。ちなみに、ひとり親世帯の約5割は相対的貧困に陥るという結果も出ています。このことは、今回の家庭教育支援のメインテーマではないですが、子どもの貧困とも深く結びついたものだろうと見ています。そして、それに対し、今後どういうことが必要かについては、約9割の人が、子育てをする人にとっての地域の支えが重要だと言っています。そういう意味では、青木委員の実践事例は、現実的かつ先を行っている、元気付けられる内容だと思います。そして、多くの人が、子育てに関する相談や情報提供する人や場、交流の場が重要だと思っています。この2点については、非常に社会教育的なアプローチが求められているところであることを確認しておきたいと思います。

そして、二番目、ここが今日のメインになります。子育て当事者の目線に合わせた支援のあり方を考えるということで、今回は一つの事例にこだわってみたいと思っています。これからご紹介する事例は、ある女性Aさんという方で、私も関わっている地域の子どもたちの居場所づくりのメンバーだった方です。

この方は東京の下町で育ち、結婚を機に地元から離れて子育てするようになりました。この方が、あるとき不登校経験の若者たちを交えたセミナーに参加されました。そのときは、すでに出産され、子育て中でしたが、わざわざ情報を聞きつけて遠くから電車で1時間半ほどもかけて参加してくださったのです。そのときに、不登校経験の若者たちの生の声に触れて自分自身もその生きづらさというものを語ってくれました。「私も、子育ての中で、不登校のような状態だった」というおっしゃり方をしていましたが、それがどういうものだったのかについて、これからお話しします。結婚から孤独な子育ての日々の中を、どのような思い、感情の中で生きてきたかがありありと語られています。今回、この事例を手がかりにして、できるだけ子育て当事者の経験世界に目線を合わせて、子育てをめぐる課題と、その課題がどういう構造で生み出されてしまうのかということを丁寧に見ていきたいと思っています。そのことで、家庭教育支援のあり方を考える上で必要な視点は何か、当事者の目線からどうやって支援を考えたらいいかについてお話ししたいと思います。

Aさんの簡単なプロフィールです。この方は、中学校の頃から地元のジュニアリーダー活動に参加し、大学生になると、地元の子どもたち、小・中・高校生のキャンプ活動の支援やレクリエーション活動など、様々な地域活動のリーダーとして活動してきた方です。生まれ育ちは、都内でも、地域での顔なじみが非常に多い、大人とのつながりが多い区です。そこは、ジュニアリーダー活動がかなり活発な区で、おそらく23区の中で一番ジュニアリーダーが多い地域だと思います。地域ごとに青少年対策地区委員さんがいて、皆さんが必ず、地域の子どもたちの面倒を見ている。ですので、地域の大人と顔見知りの子どもが多いのですが、そんな中で生まれ育っている方です。大学に進学してからは、リーダーとして活躍していきますが、大学では健康科学も学び、スポーツが得意でした。大学卒業後しばらくは、非常勤

で社会教育指導員として働いていた経験があります。そういった前提になるものが後々、効いてくることとなります。

次に、このAさん自身の経験を皆さんで読み合わせていきたいと思います。

“結婚してから、とても大切にしてきた地域活動、仕事、つながりのすべて置き去りにして地元を離れ、私は引きこもりました。” Aさんは、結婚した相手が転勤の多い職業で、東京都区部から千葉県内に引っ越しました。そこは、非常に都市化が進んでいるところで、東京への通勤圏です。そして、現在は、すでにそこからも引っ越している、それぐらい流動的な環境です。同じような環境は、若い子育て世代の中にあり得るもので、人口移動が非常に激しくなっている一つの典型事例といえると思います。そういう状況にあって、“私は、引きこもりました。自分で選択したはずの結婚自体に疑問すら抱える日々でした。仕事もなく子どももなく、働けるのに働いていないこと、稼いでいないのに消費ばかりしていること、生きているだけで家庭や社会にマイナスの効果しか生んでいない、そう思いながら寝起きする日々でした。挙式中に「しっかりやりなさいね。」と最後の厳しさを与えてくれた母の言葉が、いつも頭の中をぐるぐるとしていました。

仕事を持たない、稼ぎがないということがいつもついて回り、気分転換に外へ出ても、「昼間からぶらぶらしている若者」＝「ダメな大人」と見られている気がして、電車に乗っても「稼いでいないのにお金ばかり使っている」申し訳なさで外出しなくなる。家にいてもクーラーをつけられない、部屋の電気もつけられない、トイレを流すのもどうだろうと光熱費のことばかり考え気が休まらなかったのです。

仕事を持たないまま妊娠が分かり出産しました。怒涛の子育てが始まりました。子どもとの時間は温かく、微笑みと幸せが溢れ、「お母さんになりたい」という自分の夢が叶うときが訪れる、そう思っていました。でも現実は全く違っていました。子育ては毎日が不安で、はじめての連続で、正解を求めても「子育てに正解なんてないから、大丈夫」と全然安心できないお決まりのフレーズしか返ってこない。ただただ睡眠不足と疲労だけが蓄積されていきました。

自宅に子どもと二人きりの時間が長く続きました。出かける先はスーパーだけ。誰とも話さない、子育て以外のことに何も頭を使わない、使う暇もない、そんな時間が長く続きました。社会活動のすべてから隔離されているような、このまちの誰も私たちの存在を知らないような、居ても居なくても良い存在になってしまったような気持ちになりました。

人とつながり合うことの良さ、楽しさは、おかげさまでよく分かっていたので、”先ほど紹介した、ジュニアリーダー活動をやってきたという経験が、ここに生きてきます。“なんとかそういう場を見つけてつながることができました。子育て支援館の仲間ができてからは、本当に新天地の生活が楽しくなりました。スーパーでも公園でも、私たち親子を知る誰かに会える、挨拶する人がいる、それだけで幸せでした。

支援館に居る間は「優しいお母さん」「お母さんは我が子が大好き」「お母さんはいつも家事をちゃんとやっている」というあるべき姿から解放され、「我が子ムカつく！」談義に花

を咲かせたり、「今夜のおかずはお惣菜だけにするから、もうちょっとここに居ちゃおう」と高らかに宣言してみたりして、とてもリラックスして過ごすことができました。その自治体では「子育て支援館」を整備しているのですが、その名称が「子育てリラックス館」となっていて、それが非常にしっくりきていました。

子育ては孤独です。そして、「正解がない」ので自分のしていることを肯定しにくく、「加点!」と思えることはないのに「減点…」と思える失敗は続き、母としての自信なんてものは一向に育たないのです。それに子どもが生まれた瞬間から「自分」は不在で「〇〇ちゃんママ」として我が子の世話をし、我が子のタイミングで寝起きをして、自分の好きなことに没頭できる、集中できる時間はなく、自分を生きることが困難になります。”そういう事例です。

先ほど青木委員から発表のあった事例のように、学齢期、すなわち学校に入れば、それを通じて子どもたちはいろんなところにつながるきっかけも出てきますが、この事例は産前産後の事例で、一番孤立しやすい時期かもしれません。ここにフォーカスすると、いろんな意味がここには埋め込まれていると思います。それを、私の方で読み取った限りのことを整理してまとめてみました（レジメ3ページ）。もちろん、これからの皆さんの議論の中で、この事例と皆さんの経験を合わせてみると、もっと違った意味がそこから浮かびあがってくることはあると思いますので、そういう意味では一つの参考にしていただけたらと思います。

事例から見てくる子育て当事者の生きづらさの内実、まず一つは、自分を生きるのが困難、孤立した子育てが生み出す当事者自身の存在不安ということ。居場所のなさと言ってしまえば、一言で済むかもしれませんが、それは、自分自身がもう生きられないというような状況になっていく。それは、“このまちの誰も自分たちの存在を知らないような、居ても居なくても良い存在になってしまったような気持ち”であるとか、“子どもが生まれた瞬間から「自分」は不在で「〇〇ちゃんママ」として我が子の世話をし、我が子のタイミングで寝起きをして、自分の好きなことに没頭できる、集中できる時間はなく、自分を生きることが困難。”そうしたことが起こっていることがわかります。そして、その生きづらさのもう一つが、「あるべき家庭人・あるべき母親」と「ダメな自分」とのせめぎ合いが、子育て中のお母さんの中では葛藤としてあることが読み取れると思います。つまり“仕事もなく、子どももなく、働けるのに働いていないこと、稼いでいないのに消費ばかりしていること、生きているだけで家庭や社会にマイナスの効果しか生んでいない…”“「稼いでいないのにお金ばかり使っている」申し訳なさ…”とか、“「昼間からぶらぶらしている若者」＝「ダメな大人」と見られている気がする…”というようなこと。部屋の電気さえつけるのが申し訳ないという気持ちに苛まれ、地域でしっかりと社会性を身につけて暮らしてきたからこそ、もっと自分はしっかりしなくちゃ、貢献しなくちゃ、と思っているわけです。でも、それが逆に自分を縛りつけてしまうという、ブーメランのように作用してしまっているのが見えてきます。引きこもりという状況の中にある当事者が、これがすべてではないですけれども、

それまでの中で自分の中に内面化された社会的な規範によって自分自身を苦しめているという構造も、これで見取れると思います。お母さんになったら「優しいお母さん」「お母さんは我が子が大好き」「お母さんはいつも家事をちゃんとやっている」という、あるべき姿というもの、それは自分の中で作ってきた理想でもあると思いますが、楽しみにしていたお母さん像に逆に縛られてしまうこともあるのが見てとれます。三つ目に、「正解のない子育て」。子育てが困難な状況の中にあるということは言えると思います。昔ながらの地域コミュニティがあり、ある程度大人になる道筋が見えていた時代であれば、親として、いつ何をすべきかを、地域も教えてくれるし、子育てしながら親自身も育つというサイクルがあったと思いますが、今、地域コミュニティそのものがかなり脆弱になってきています。都市化の中で、分断がすすんでいると言えると思います。そして、地域で育ったら地域に戻ってくるわけではなくて、今は、どんどん他の世界へ行ってしまおうとなると、何をもって大人になるか、一人前になるかという道筋が見えにくい。そうになると、親としても、どうすればいいのかというある一定の正解が見えにくくなる、ということも背景としてあるわけです。ですので、何が正解なのか分からない。分からないけれども、減点はあっても加点はない。やってしまったことに対して「あ、しまった」ということはあっても、これがよかったという確信は、なかなか持てない、そういう自信が育たない構造があるわけです。そして四つ目です。身近な生活圏で相談できる人、心許せる仲間を見つけることも困難になっている。そもそも、外から転入してきた子育て世帯にとっては、まず、どこへ誰にそれを相談していいのか、なかなかきっかけが掴めない状況があるわけです。面倒くさくても、毎日のように、みんなで集まって井戸端会議ができるような、何か半強制的な場があるなら、そこを使って出会うことができます。しかし、未就園・未就学の段階だと、そのきっかけさえも掴みにくいです。保育園、幼稚園、小学校と上がっていけば、先ほどの青木委員の発表にもあった「子縁」というものが、大人同士がつながるきっかけ、入り口になりやすいと思いますが、それ以前の世帯になってくると、非常に難しいことが見えてきます。“自宅に子どもと二人きりの時間が長く続いた。”とAさんも言っています。

こうした当事者の目線から見た生きづらさを確認してみた上で、では、彼女はどのようにして孤独な子育てと生きづらさから脱出したのか、その要因はなんだろうかというのが逆に見えてきます。

まず一つ目は、何よりAさん自身が、小さい頃からのジュニアリーダー活動や地域活動を通して人とつながる楽しさや良さを知っていたこと。これは、今回の社会教育の観点から見た家庭教育支援を考える上では、非常に重要な指摘だと見えています。二番目は、大人としてダメな自分も安心して出せ、共感し合える仲間を得たこと。子育て支援館に自らつながったところがすごいのですが、自らつながったことによって、「優しいお母さん」「お母さんは我が子が大好き」「お母さんはいつも家事をちゃんとやっている」というあるべき姿から解放され、「我が子ムカつく！」談義に花を咲かせたり、「今夜のおかずはお惣菜だけにするから、もうちょっとここに居ちゃおう」と高らかに宣言してみたりして、みんなでそれを笑って、

共有できるような仲間が得られたわけです。そして三つ目として、生活圏に顔の見える仲間ができたことで、地域に生きていることの実感を得られたこと。彼女は「子育て支援館の仲間ができたことによって、スーパーでお互い声をかけられる、顔の見えるつながりができただけで本当に幸せでした。」と言っています。それほど追い詰められる。つまり、特殊な方たちではないということです。子育てに関して非常に息苦しさを感じている保護者への支援においては、もちろん専門家が入れなければいけないケースもあるのですが、おそらく、ごくごく普通の人も、ちょっとしたきっかけで、こういう状況に陥ってしまうことがあります。だから逆に言うと、本当に顔の見えるつながりによって救われるということでもあるわけです。

そこで、今後の方向性、あり方について、私から提案させていただきます。社会教育における家庭教育支援のあり方について、子育て当事者の生きる意欲、解決する意欲を引き出す家庭教育支援という視点を出してみました。つまり、ここに見えてくるのは、子育て当事者は、単に困っていて助けてもらいたいというだけではなくて、自分で解決する力はある。その意欲さえ支えられれば、自ら何とかしていこうという力も当然あるわけです。保護者同士でも、連携しお互いインフォーマルな仲間を作ることによって、相談し合いながら、自ら解決し合っている部分があるわけです。それは非常に大きい。そこをしっかりと踏まえた上で、どういう支援があったらいいかということを考える必要があるのではないかと。しかし、この事例に基づいて見てみますと、子育て中の苦しさやしんどさなどに、耳を傾け聞いてくれる人をどうやって確保したらいいか、という課題があります。未就園・未就学の子育て世帯の場合は非常に外に出づらいわけです。そうなるとうちでも、アウトリーチが必要になってくる部分は出てくるだろうと見ています。確かに、社会教育は、アウトリーチ的なアプローチはこれまであまりしてこなかった部分ではありますが、例えば、保健師が、出産後間もない家庭に訪問して話を聴くことがあります。そういうときに、いろんな社会教育的な情報を一緒に携えて、つないでいただくことは、一つ考えられるのではないのでしょうか。これが自ずと次につながってくるのですが、仲間づくりの場や機会へつないでくれる情報を子育て当事者にいかに届けるかということです。引きこもってしまって自分でもどうしようもない、外の情報はわからないとなると、こちらから直接、できれば手渡ししてあげたほうが良い。特に、外から転入してきた人たち、若い世帯、子育て世帯にとって、本当に何をどこから手をつけていいかわからない状況があります。悩んでいる最中は、何が課題かすら分からない、次に何をすればいいかも分からない、おそらく1、2年経って振り返ったときに、それが課題だったことがわかるというのは当事者のこととしてあります。ですので、外につながる情報を、いかに当事者に届けてあげられるかというのは重要な視点だと思います。その際、子育て世帯、特に産前産後期で非常に自己肯定感が低くなってしまっている、自信をなくしているという状況の中では、そもそも、自分が歓迎されていると思っていないので、たった1～2度、ただ、どうぞパンフレットありますよ、では、絶対出てこない、出られないと思います。そこには、「ようこそ」とか「ぜひ、いらしてください」という、「あなた方

親子に対して温かく思っています」というメッセージをどうやって届けるかが重要だと思います。ただ情報を渡すのではなく、そういうメッセージとともに渡すこと。そして、子育て世帯以外の他世帯に向けて、理解と共感の輪を広げるということ。子育て当事者の社会的な負い目やプレッシャーをいかに軽減するかということについても、もう少し考えなければいけないと思います。一つ事例を用意しました。世田谷区と民間とのコラボレーションのプロジェクト「WE ラブ赤ちゃんプロジェクト」というもので、つい先日、6月3日からスタートしました。これはウェブ検索サイト エキサイトという会社が始めたそうですが、缶バッジやステッカーを作って、「泣いてもいいよ」というメッセージを伝えています。電車の中などで、別に泣いたっていいじゃないかと、周りの人もほとんどは思っている、それをメッセージとして出しにくいと思います。そこで、この缶バッジなどを付けて、少しでも子育て当事者への社会的なプレッシャーを軽減させようというプロジェクトです。日常の中で、そういう眼差しを見える化しようという取組です。

次に、社会教育における家庭教育事業・活動を展開する際に配慮すべき点を四つ挙げてみました。一つは青少年期から人とつながることの楽しさ良さの体験機会を豊富に提供することは、予防的な対応として重要なことが改めて確認できたと思います。青木委員の報告を裏打ちするような形にもなると思いますが、彼女がここから脱出する原動力、ベースになったのは、地域の人と関わること、つながり合うことの良さを知っていたことだったと思います。ですから、自分なりにもがいて、情報を自分から取っていったということが大きいです。次に、子育て世帯の仲間づくりの場や機会を提供する際には、参加者同士が安心して関わりつなげられる配慮が必要です。公民館でも、子育て中の親御さんのサロンなどをやっていますが、参加者を集めて、担当者の方は、ただ後ろから見ているだけということが結構あります。人とつながることに自信を失って負い目を感じている若い子育て当事者にとって、勝手につながってくださいというのは、なかなか大変なことです。ですので、そういう配慮は非常に大事な部分です。つまり、居場所づくりということが必要です。自分を生きることが困難になりがちな子育て当事者にとって、子育て以外の楽しみも大切です。伝統的な公民館事業の中では保育つき事業が展開されてきたと思います。改めて、こうした保育つきの事業、講座すべてを子育てのテーマにしない、一人の学習者として、様々なテーマに触れられる、安心して子育て以外の時間を作って参加できるようにサポートすることが非常に必要だと思います。そして、繰り返しになりますが、子育て世帯に、“招待”“歓待”のメッセージを送ることが大切です。

最後に、今後の調査や検討に向けて残された課題についてです。これからの審議会で調査も予定されているようですが、今回の発表は、産前産後期の子育て家庭を中心としたものですので、子どもが学齢期になったときの子育ての課題とか、家庭教育の課題は何か、傾向を知るためのアンケート調査ももちろん必要ですが、もう少し質的な中身を丁寧に読み取るような聞き取り調査も、それほど多くなくてもいいと思いますが、必要だと考えます。その際、新しい住民層と、昔からいる住民層がミックスしている地域もあれば、ニュータウンの

ように、ほぼ一斉に引っ越し新しい世帯が入って来ている地域もあれば、ずっと昔ながらの地域もあるので、それぞれの地域性も配慮しながら、できれば、当事者への聞き取りなどを入れたらいいのではないかと思います。

○鈴木会長

青木委員と萩原委員から発表していただきました。ありがとうございました。

今日は二人のお話を伺って、我々の問題意識みたいなものをちょっと共有できる部分があれば、共有していきたいと思っています。

まず、青木委員の発表について、確認したいことはございますでしょうか。

○萩原委員

二点教えていただきたいと思います。

一点は、森の里地区の地域性についてです。レジメ 5 ページに掲載されたこの地区の写真を見ますと、住宅がかなり整備されているように見えますが。

○青木委員

新興住宅、一斉に入居した、いわゆるニュータウンです。新興といっても、当初の入居から 30 年が経過しています。厚木市出身者は少なく、全国から住民が集まって来ており、そのほとんど、おそらくは 75% くらいが、都心に通うサラリーマンです。

○萩原委員

もう一点は、既存の事業を家庭教育支援の視点から再評価しているとのことでしたが、この一つ一つの事業について、これは家庭教育支援事業としても認定しますといったことなのででしょうか。

○青木委員

やってみましょうということです。そういう呼びかけをそれぞれの地区でやってもらって、森の里では 14 の事業をみんなで家庭教育支援事業になるような方向に向けて考えてみましょうということです。

○萩原委員

それは、様々な施設や団体、場において同時に展開しているものを、一覧にしてみてこれを家庭教育支援としてつなげて考えてみたらどうなのか、というのをやってみましょうと。そういう整理する作業があったわけですね。

○青木委員

そういう作業は行いましたが、森の里地区は、以前からそういう考え方を持っていたのでスムーズにいきましたが、他地区は大変でした。

○萩原委員

ありがとうございました。

○鈴木会長

それは、教育委員会の事業として行われてきたということですね。

○青木委員

そうです。地区によっていろいろ特徴があり、一概にすべてが同じようになるとは限らないので、それは、各地区で考えないといけないということで、睦合南地区は睦合南の考え方を持って、これとこれが、家庭教育支援事業にできるでしょうと考えていきました。森の里地区の場合は、もともと、地域で子どもを育てようという考えで動いていたので、14もの事業ができたわけですが、他の地区は3つか4つぐらいが普通です。また、全15地区で事業を開始した時には、やはり理解が十分でない地区は幾つかあって、必ずしもうまくいっていない地域があるのも現実です。ただ、1年や2年そういうことがあっても、やはり積み重ねが大切で、家庭教育支援情報フォーラムを通して、それぞれの地区の公民館の職員や館長や、地区の自治会長さんが考えていくことが必要だと思いますので、根気よく続けましょうということをやっています。

○鈴木会長

青木委員の発表事例は、行政の施策として行われているけれども、そこにいる青木さんは、民間の人間としてそこにに関わりながら、今は、公民館長を非常勤でやっている。つまり、青木さんは二重、三重の意味を持つような、面白い存在となっているということですね。

○青木委員

長く育成活動をやっていた基盤があったので、家庭教育支援事業を立ち上げる時に、その育成事業が絶対に役に立つだろうと思ってこの事業を市に提案しました。市のほうも、基礎からやっていかないと、なかなか家庭教育の支援にはならないということで、一番弱い部分を地域ぐるみでやっていく施策にしようということになったわけです。

○鈴木会長

一方、萩原委員の発表は、Aさんを例にとったわけですが、一般的に子育て支援としてどのような観点が必要かということを整理して示していただいたというふうに考えればいいのかと思いますが、しかし、その中でも、Aさんは小さい頃から社会教育系の活動に親しんでいたというようなことをもある、ということですよ。そのあたりを、整理する上で押さえておきましょう。

さて、ではフリーディスカッションということで、ご意見等ありますでしょうか。

○青木委員

ジュニアリーダーについて発言したいと思います。厚木市では、ジュニアリーダーが一度つぶれかけたのですが、私たちが再び立ち上げて、今、7～8人のジュニアリーダーがいます。そのうちの一つが森の里地区ですが、あるジュニアリーダーの親が「自分の子どもは地域に育てられた、だから今度は、私が地域の人に返したい」と言ってスタッフに入ってくれました。これは、私にとっては涙が出るぐらいうれしいことでした。そういう積み重ねがとても大切だと思っています。その親も、子どもが大学に入り子育てが終わったので、今度は私が地区で活躍する番だということですね、やはり、ジュニアリーダーの力は大きいと思っています。

○小山委員

ちょうど昨日、PTA役員の方たちとお話しする機会がありましたので、「子育て」ということで、その時の話をしたいと思います。

校長の立場で、保護者の方と直接話をする場面というのは、決して多くはないのですが、そういう時によくお話しするのが、「子育てってやっぱり大変ですよ、難しいですよ。」ということです。なぜかと言うと、例えば小・中学校の授業で「子育て」について教わった方は、おそらく、ほとんどいらっしやらないと思います。「子育て」とはこういうものですよということを、学校教育の中で、少し触れるくらいはあっても、きちんと教えることはまずありません。ですから、何も教わっていない状態で、ある日突然、子どもが生まれてきて、あなたが今日からこの子を育てるんですよ、と始まってしまう世界です。ですから、難しいに決まっていて、分からない。そこで、我々は、おそらく原体験というものでやってくると思いますが、それが、非常によい体験であれば、うまくいくと思います。それは、例えば自分の両親がそばにいて、常に手伝ってくれたりとか、周りのサポートがあったり、という意味で、今日のお話は、行政が何かそういうことをサポートしてくれるのは、とてもいいことだと思います。ただ、本当にそういうことが全然分からなくて、子育てもままならず、家庭の状況があまりよくないというのは、実際にあることです。それが表に見えている場合は、割と、区役所や児童相談所が関わってくれたりするので、まだいいのですが、表に見えてない場合が、なかなか大変です。また、仮にそうでなくても、やはりどの保護者の方も何らかの形で、我が子のことで、困っていることは必ずあります。

ですので、PTA役員さんたちと、学校は子どもが学習する場ではあるけれど、大人にとって子育てをみんなで勉強できる場だったらいいですねという話をしました。そういう時に、特に校長が、せっかく来ていただいた保護者の方たちに良い話ができるように準備をしておくべきだと常々感じています。

私は常々、「苦情は受け付けません」と言っています。苦情ばかりを言い放たれても、結果、あまりいいことはありません。「言うのはいいですが、相談しましょう。」と投げかけています。また、「転ばぬ先の杖を、何本用意していますか」という話もします。そんな話をしていくと、結構面白がって皆さん聞いてくれたりします。

もう一つは、保護者の方がいろんな形で悩まれている時に、うちの子はなぜこうなんだろうということについて、本当に大人が理解しているかどうか、ということがあります。例えば、あなたはこうあるべきだと大人が信じこんでいても、できない子どもたちはたくさんいます。その原因には、障がいなども含めて様々なものがあり、そういうことを我々が知識として持っているか持っていないかで、その先の対応が全く違ってしまいます。ですので、教育者としては、そういうことも知識として取り入れておかななくてはならないと感じています。

いずれにしても、悩まれている方がたくさんいて、その方たちの中には、我が子の言っていることが情報の100%だと思って学校にぶつけてくる場合もあり、それがクレームになりがちです。それを、「そうじゃないですよ」「こうですよ」とやわらかく受けとめながら、

みんなで考えていくことは必要だと思います。そのために、いろんな方面の方たちに力を貸していただきながらやっていくことがとても大切だと感じています。

○浅野会長

県の小学校長会で副会長しております浅野と申します。どうぞよろしく申し上げます。

先ほどの青木委員の発表を伺って、一小学校長として、非常に素晴らしい活動されていると思いました。特に、小学生へのアンケートで、「地域に参加する」とか「地域の大人から教えてもらった」という項目にイエスと回答する児童の割合が、森の里地区は高いことに驚きました。学力学習状況調査の中に同様の質問がありますが、本校の児童では、この割合が非常に低いです。本校の児童が地域の活動に関わることを、どのような形で促進していくかというのは、学校としても非常に難しい課題だと感じているところで、こういう事実があるのを伺って、素晴らしいと思いました。学校教育は、家庭教育や地域の教育力に支えられてできるものですので、地域の中にこういう活動を推進する方がいらっしゃることは、森の里小学校にとって、非常に大きな力になっているだろうと思います。先日の登戸のような事件も、地域の方の力によって、子どもの安全性の確保については全く違ってくると思いますので、土壌としてこういう組織があることは、非常に心強いと思います。

一方で、青木委員が最後の方に言われていた、これからは学校を巻き込むしかないという話なのですが、こういう活動をされている方は、大体、最後に学校を巻き込むとおっしゃられます。学校にとって一番大切なのは、学習指導要領に沿って子どもたちにきちんと教えていくことになりますので、その範囲で、できることとできないことがあります。その中で、青木委員のように熱意を持った方々は、学校にいろいろ言っても、学校は全然なびかないと、残念な思いをして帰られる方がよくいらっしゃいます。これは、学校の反省点の一つにもなるのですが、学校の方でも、できる範囲で一体化してやっていければ、さらに素晴らしい活動になるのではないかと思います。

○山田委員

お二方の本当にすてきな発表を聞かせていただきました。

私も、ボーイスカウト関係で子どもに関わることをやっているのですが、本当に人との関わりというのは素晴らしいなと思っております。ボーイスカウトも、いろんな地域の方達が指導者になって育ててくださっています。ボーイスカウト出身の息子も、その中で成人になるまで育てられたので、私も御恩返しので、今、リーダーとして、他のお子さん達を見ています。息子は、親ではない他の成人の方たち、いろんな職業の方達に関わらせてもらって、とてもいい経験をした、育てられたということ、いまだに言っています。私も、自分の子育てが終わって、ある程度子育ての経験をしてから、よそのお子さんを見たので、とても視野が広がりました。自分の子育てでは、自分の子どもしか見ていませんでした。活動を通じて、いろんな性格のお子さん、発達障がいのお子さん、ボーダーの方達など、いろんなお子さんと関わらせていただきましたが、その子どもたちが、とても喜んで活動に来てくれます。学校では仲間に入れないけれど、ボーイスカウトの関係だったらとても喜んで来てくれ

て、居場所としてとても落ち着くらしいんですね。そういうお子さん達に関わらせていただくことを通じて、私自身が、子育てで悩んでいるお母さんに話ができるような立場になったということが、とてもよかったと感じています。ですので、今日のお話は、本当に素晴らしい活動や、実例を交えたお話で、今後ともこういうものを生かしていきたいと思っております。

○小野委員

厚木市の「教育委員会だより EduNavi」、素晴らしい冊子だと思いました。これは、どのくらいの期間で出されているのでしょうか。

○青木委員

確か年2回だったと思います。教育委員会が出しています。

○小野委員

ニューズペーパーですか、ブックレットですか。また、配付方法は。

○青木委員

ニューズペーパーで、全戸配布です。配付方法は、公民館を通じて厚木市広報と一緒に配付されます。

○小野委員

私が一番感じたのは、こういう熱心なリーダーがいること、リーダーを育てられることが一番大事だということです。それから萩原先生のお話から、情報が、案外手渡しでいくと、それから、どうぞいらしてくださいとか、ようこそという気持ちが、人から伝わるということに感動を受けました。情報を、ただ出しっ放しにするだけではいけないということを実感しました。

○鈴木（紀）委員

今日は、とても貴重なお話をありがとうございました。お二方のお話を伺ってとても参考になることが多くありました。その一点目として、対象となる年齢によって、求められる支援のニーズが違うことを改めて感じました。また、地域における担い手やリーダーという存在が、ある地域とない地域とで、随分違うだろうと感じました。

以上のいろいろなお話を伺って、私が感じたことは、近年、共働きがとても増えていて、子どもに接する時間がなかなかないとか、学校や幼稚園、保育園などの機関と関わっていくのも難しいお父さんお母さんがいらっしゃる中で、地域とそういう人達をどうつなげながら家庭支援をしていくのか、どうすればできるのか、考えるところがありました。

人のつながりの作り方も、実際に手渡しするとか、顔の見える関係でできるのがやっぱり一番強力ということですね。ただ、ネットやメールでお知らせが届くだけではなく、顔の見える関係の方から声をかけられると、行事の参加率が上がるということは、私も日々大学でやっていて感じるころなので、そういった関係づくりも大事だということを改めて実感しました。

○木下委員

地域と学校をつないでいくには、その拠点として公民館が必要です。私も、青木委員と同じく厚木市で、厚木の公民館は非常にしっかりしていると自画自賛しているのですが。それと、青木委員の発表の中で紹介のあった、モデル地区として森の里と一緒にやった睦合南というのが、私が住んでいる地区です。

私は、平成 18 年度から 23 年度まで公民館長をやらせていただき、その後、モデル地区となった 25 年度からは、公民館の運営懇話会の会長をやっていましたので、モデル地区になったときは、家庭教育支援事業実行委員会の委員長をやらせていただきました。

睦合南地区は、昔からの住民と新しく来られた住民が混在していますが、およそ 9 割は新しく来られた住民が占めるという地域です。ただし、新しい住民といっても、昭和 40 年代後半の開発が始まったころに来られた方から、最近、来られた方までいます。地区内には 12 の自治会があり、発表にあったような取組と一緒にやっている状況です。

睦合南地区でも、既存事業を見直して家庭教育支援の事業に結びつける形でそれぞれをやっており、そのうち、二つの事例を紹介します。一つは、地区大運動会があります。厚木市では、それぞれの地区で秋に大運動会を行っていますが、睦合南地区では、これを家庭教育支援事業の一つと位置付け、中学生のジュニアリーダーを中心とした何人かに、体育振興委員と一緒に企画の段階からスタッフの一員として入っていただく形で、25 年度からスタートさせました。中学生が入ることによって、新しい斬新な発想が出てきます。従来の運動会の種目に新しいものが加わり、参加する人たちも多くなっています。特に、リレーは大運動会の最後の呼び物になっていますが、3 年ほど前からは、そこに中学生チームが参加するようになり、一層盛り上がるようになってきました。

もう一つの事例として防災訓練があります。防災訓練は、これまでも、防災の日に自治会単位でやっており、そこに、公民館長や職員が回って、どのような形でやられているか確認しています。これも、家庭教育支援事業の一つと位置付けるにあたり、小学生・中学生の人たちに一緒にやってもらう形にしました。例えば、消火訓練や、毛布で即席の担架をつくるといったことを、中学生が子どもたちと一緒にやりながら教えたりします。中学生の参加は、従来、非常に少なかったのですが、この取組により、中学生の参加が多くなってきました。また、実際に何か起きた際、それが平日だと、地域にいる大人が少ないことが想定されますが、中学生は学校にいますので、すぐ応援に駆けつけてもらえるのではないかと考えています。これも、一つの新しい試みではないかと思っています。

○市川委員

磯子区選出の神奈川県議会議員市川さとしでございます。いつもお世話になっております。私は、小学校の P T A 会長 12 年、中学校の P T A 会長を 2 年務め、現在も進行中で小学校の P T A をやっております。人生の何分の一かは P T A というぐらいです。子どもたちと常に触れ合っていて、今日も 10 時から運営があり、その後は、安全安心まちづくり推進委員会というふうに、子どもたちに関わる会合がたくさんあります。12 年前と今の子どもたち、そして保護者の考え方等々、若干変わりはありますが、でも、自分の子どもはかわいい

いし、やはり子どもを守りたいという気持ちはいつになっても変わらないと思いますので、皆さんのお話を伺って、いい話だなと思っています。12年間小学校のPTAをやっている中で、いろんな地域活動をしております。私は、子どもが高校3年生と大学2年生で小学校の子どもはいませんが、地域から選出される形でPTAに関わっています。ですので、先ほど指摘が出ていた“学校を巻き込む”ということではなく、私の場合は、“学校から巻き込まれた”という感じです。ある校長先生が8年ほどその小学校にいまして、その校長先生と一緒に、地域とともに巻き込まれてまちづくりをしていったような状況でした。うちの学校は230人ぐらいしか児童がいないのですが、周辺はマンション群で、自治会がしっかりとおり、一軒家は全くないという状況の中で、横のつながりが非常にとれていると思っています。育成協議会などでも、地域の方達が非常に積極的に参加してくださるので、子どもたちの安全安心は、地域の方に見守っていただけていると感じています。また、「学援隊」を組織し、胸から下げたり、自転車やカバンにつけるプレートを地域に配布し、地域が常に子どもたちを見守っていることを見える化する工夫をすることで、今のところ、犯罪が少なくなっているのかなということはありません。

また、地域イベントについても、学校の土地を利用した芋ほりや親子で防災訓練などを行っています。防災訓練は、終業式の日任意で行っているもので、子どもたちにカレーを作ってもらったり、消防署の方に来ていただくなど、地域防災拠点とは違う、親子で体験していただくようなことをやっています。これは、もう何十年もやっており、何年前までは、学校に宿泊していましたが、近年は、セキュリティの問題で宿泊はできないということで、夜9時頃には帰るようにしています。来月もこのイベントを実施する予定ですが、今の準備でも、なるべく地域に何かしら絡んでいただくように作業しております。

今のお母さんたちの中には、孤立している方もいますし、磯子区は外国籍の方も非常に多いです。そういう人たちと共有をしていけるようなことを考えていければと思います。

県でも「かながわ児童虐待防止相談員ライン」を試行するなどしています。そういうものも利用していただけたらいいかなと思っています。

○鈴木会長

生涯学習審議会が県議会を巻き込む、その仲介役になっていただけるのではないかと思います。うのでよろしく願いいたします。

○小池副会長

子どもを育てている親などへの支援策は、今、行政の様々な部署がやっていて、この審議会の答申の中では、社会教育ができることとできないことを、区分してやっていくことが大事だと思います。子育て当事者の目線に合わせた支援のあり方について、萩原先生が大事なことをおっしゃっていて、本当にそうだと思います。青木さんの発表のように、親一般、子どもを育てている人たちはすべて対象という支援もあるし、働いている母親、或いは、今回、働き方改革関連法案ができて、お父さんたちの残業は月45時間未満になりました。そのことによって何が変わるのかとか、何が社会教育の可能性として新たにそこに出てくるのか

という、働いているお父さんお母さんたちに対しての可能性とか、あと専業で子どもを育てていらっしゃるお母さんたちの苦しみは、働いている母親よりも大きいという話も一方にありますから、そういった人たちを対象とした支援もあると思います。そのほか、ひとり親家庭の問題は非常に大きいだらうということ、ダイバーシティということでも国籍も多様化しているし、家族の関係も多様化している中で、何が可能なのかということ、また、特別支援学校に学んでいるお子さんを持つ親が、特別支援学校は県立なので、なかなか、地域との交わりがない中で、子どもも親も孤立化した子育てをやっている、そういった親御さんたちに、埼玉県の場合は、公民館が特別支援学校の隣にあるので、そこに子どもを通わせている親御さんのためのプログラムを一生懸命やっているとか、そういうふうに、子育て当事者を、どういう人たちに設定するのかで、今後の整理のあり方というものを、この人たちのためにこういうこととか、今までやってこられたことを踏まえながら、新たにもう一歩何ができるのかということや学校教育の枠組みで社会教育がやるのではなく、社会教育ができることを、やっていくのが、大事なのではないかと考えました。

○鈴木会長

萩原先生のお話を伺っていて、「待てよ、そうだよ」と思わせられました。結局のところ、未知の状況にどう対応するか、対応している人をどう支援するかということ。或いはその困難な状況に立ち向かっている人にどう支援するかと、そういうことであって、子育て支援だけではないんですね。おそらく、高齢者の介護の問題や障がいがある方、その他の貧困の問題などへの対応の仕方として、様々な論点があったと思います。それは、社会教育のあり方というか、役割というか、そんなようなものになるのかなという気もするんですよ。それは要するに、社会教育のやり方がどれだけ意味があるかということになってくると感じました。そういう時に、行政だか民間だかわからない青木さんのような人の役割、それがかなり重要になってくると思います。行政だから何とか民間だから何とかという話ではなく、そこがあいまいな青木さんのような人の存在というのが重要だということかもしれない。そんなことも、ここで考えていけると良いかもしれません。行政はこうすべきだとか、民間はどうすべきだということではないようなことも考えていければ面白くなるかと思いました。

今日、またいろんな論点が出てきたと思います。事務局大変でしょうが、また整理をお願いします。次の予定ではどうなっていますでしょうか。

(2) その他

○事務局

14期の審議スケジュールについてですが、前回お示しした案について、会長の方から「調査」の前に1回検討する機会があったほうが良いのではというご指摘がありましたので、追加しました。ただし、あくまで目安ですので、また進捗状況を見ながら進めていきたいと思えます。今回は、7月末から8月を予定していますが、準備中ですので、日程決まり次第、改めてご連絡差し上げます。ぜひご出席いただきますようお願いいたします。

(以上)